
狐付き

シンシンノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐付き

【Nコード】

N1660BA

【作者名】

シンシンノ

【あらすじ】

狐に妙に敬われる主人公 白崎誠也は山で狐の嫁入りを目撃して異世界へ連れていかれる。
セーヤを主様と呼び連れ去った美しき妖狐に見守られながら修行や冒険者を通してセーヤの隠された力が覚醒していく。

処女作となります。気が向いたら生温かく見ていただけると嬉しいです。

1話1話が短いです。

寝坊

『ピーピーピー』

「ん……ん……」

不快な電子音が頭を揺さぶる……頭がボーっとしてる中音のする方に無意識的に手を伸ばす。

カツチャと音がして不快な音が消える。

「ん……これでゆっくり……」

再度心地よい世界へと旅立っていく。

不快な電子音を立てていた時計は午前7:00を指していた。

「ん……ゆっくり寝たあ〜」

清々しい朝だ。なんだかいつもより清々しい。「ん〜」と背伸びをして体を伸ばす。

「しかしたまに見るあの夢はなんなんだろうなあ？いやな感じはしないけど〜」

とそんなことを考えていると不意にあるものが目に入る。

「!?!?!?」

あれ？なんで時計の短針が9の所にあるんだろう？

- - -
- - -
- - -

「いつもなら学生やリーマンでごった返してるのに人が少なくて快適 快適」

起きて寝坊したことに気付いてからの俺の行動は早かった。

まず携帯で学校に連絡して、

「あ……すいません…ゴッホ……朝から熱が出て……ちよつと病院に行くため今日は休みます。」

うん完璧。電話にでた担当の先生も

「白崎。無理するなよ！ゆつくり休んでしつかり治せ」

と言ってくれた。日頃から真面目な態度で授業を受けていた事が功を奏して全く疑われなかったぜ。(と言ってもまだ16歳で高校生歴半年くらいだが……)

学校では一応真面目に分類されるはずだ。成績は学年でトップクラス。運動神経もよく先生方からの評判も悪くはない。いやむしろいい方だと思う。

そんな俺こと『白崎誠也』がなぜ『完全に』真面目ではなく『一応真面目だと思われているか』という顔のせいだ。とはいっても顔が悪いということではなく、むしろ色白で整っていると見えるだろう。(若干目つきは悪いが)

問題は髪だ…髪の色が……生まれつき金色なのである。なんでも髪の色素が普通と違うらしい。

理由は不明なんだが……将来禿げたりしないよね？大丈夫だよな？

目つきの悪さと金髪のせいではっと見ヤンキーにしか見えない。でも話せばそんなことないと皆わかってくれる。話せばだけど…

学校では教師はまあ『見た目はあれだが、中身は真面目』と思ってくれているようだが、同級生からは怖がられる。つというか避けられる。

小耳にはさんだ話の一部を抜粋するとだと……

『白崎さあなんか鬼島先輩を返り打ちにしたらしいぜ？』

『え？鬼島先輩ってあの『三校の鬼』って呼ばれてる鬼島先輩？』

『そうその鬼島先輩。なんでも鬼島先輩が白崎の髪と目つきが気に入らなかつたらしくて校舎裏に呼び出したらしいんだが、その後鬼

島先輩が帰ってこないから様子を見に行ったら先輩が一人で倒れてる先輩を見つけたらしい。」

『マジかよ!? 白崎さんマジパネエw俺はあの眼を見たときから3人は殺してると思ってたね』

『マジで関わらない方がいいよなあ』

『だな。生徒指導の鈴木もビビって白崎にはなんもいわねえらしいからなww』

つとこんな感じ。いや鬼島先輩は・・・ただ単にいちゃもんつけられたから、論破したら殴りかかってきたのを避けたら自分で壁に激突してそのまま失神しちゃっただけなんだが・・・

ちなみになぜ俺がその場にいなかったかという人を呼びに行こうとしたらすれ違った人が失神してる鬼島先輩を見つけて騒ぎになったから逃げた。

だって・・・なんか怖いじゃん？

鈴木先生の話だって・・・別に俺が悪いことしてないのはわかってくれてるから何も言われねえだけだし・・・髪の毛の事は医者からの診断書を提出してるしよ。

まあ話がなんか長くなったがつまり俺は学校では避けられていて友達がいないということだ：クソ・・・リア充爆発しろ。

ちなみに家族もいない。つというか：もういない。

俺は幼いころじいちゃんに預けられてじいちゃんが育ててくれたんだが、そのじいちゃんも今年の夏に他界してしまった。両親は死んだとじいちゃんから聞いていたんだが、

死ぬ寸前に、

「おまえは本当は家の前に捨てられていたんじゃない。だからワシが育てた。」

とそんなことを言われた。えーっつと法律的にそれはどうなんだろう？ありなんだろうか？まあじいちゃんのことだからどうにかしたんだろう。

現に俺はじいちゃんに育てられたし。

友達もいないし、家族もいないつまりは天涯孤独になってしまったんだなと思うと涙が出てきた・・・

つとそんなブルーな気持ちになって落ち込んでいるとアナウンスが聞こえてきた。

「次の停車駅は自然公園→自然公園→お降りの方はボタンにてお知らせください」

そういえばバスに乗ってあるところに向かっているんだった。気分を変えするために強めに停車ボタンを押す。

『バツチーン』強く押しすぎたせいで大きな音が鳴ってしまった。周りの目が痛い。おばちゃんそんなクズを見るような眼で僕を見ないで…

寝坊（後書き）

ん・・・1話どのくらいにしたらいいのかわからない・・・

動物自然公園

「ん〜やっぱりここはいいなあ〜。癒されるう〜」

「やべやっぱりライオンは迫力あるなあ」

「マジこの犬天使じゃねえ？このもふもふ具合連れて帰りてえええ」

「ちょwあの猿さかりすぎじゃねえ〜ただけやれば気が済むんだよ。」

もうお分かりかと思うが寝坊して仮病を使い学校休んだ俺がどこにいるかといえば、山の中にある『自然動物公園』である。「自然動物公園」動物がいっぱいいる！！

まあつまりは動物園です。はい。

動物が大好きで大好きでしょうがない俺は月1くらいでここに訪れる。本当はペットを飼いたかったんだけど・・・じいちゃんが動物嫌いで飼えなかつたんだよなあ…

じいちゃんが死んだ後も自分の事で精一杯だから買うことは諦める。

ライオン・犬・猫・象・猿などさまざまな動物を鑑賞しテンションが上がった俺はいつもなら近づかないエリアに足を踏み込んでしまった。

そのエリアは…

キツネ

エリアである。キツネは嫌いだから近づかない。なんてことはなくむしろ好きだ。あの綺麗な瞳・りりしい輪郭・とんがってピーンと

狐の嫁入り

「ん〜こんだけ天気がいいと昼寝日和だねえ」

『自然動物公園』を後にした俺は山の遊歩道を散策して山の緩やかな斜面に寝っ転がり昼寝を楽しんでいた。今日は秋なのにぽかぽかして暖かい。ついうとうととしてしまう。

「ん・・・寝ちゃってたか・・・」

目を覚ましあたりを見回す。空は青から赤に変化していた。

「もう夕方かよ・・・早く帰らないとな。」

起き上がり服に付いた汚れをたたき落としていると不意に

「!?!?」

『ピッチャピチャ』

「雨かよ・・・空に雲なんてねえのによ・・・天気雨ってやつか?」
そうぼやくと俺は走り出した。

「クソ・・・雨がどんどん強くなって行きやがる・・・」

どんどん強くなっていく雨。視界も悪くなっていく。そんな中どこからか：人が歩く音が聞こえてきた。

「え?こんな山の中で人の歩く音?後ろからか?しかもこの音の感じだと少人数じゃなくてだいぶ多くね?」

雨の中でも聞こえてくる歩く音。気になって誠也は振り向くと

「えええええ!!!?????」

・・・なんだあれ?普通じゃねえだろ?俺はまだ夢でもみてるのか?そこには行列が・・・しかも普通の行列ではなく100匹を超すキツネの行列中盤には時代劇で見るような「籠」を担ぐキツネまでい

る。

言葉を失い、訳がわからない状態の誠也。そんな中、籠の窓？からこちらを見る視線を感じる。

そちらをみると白無垢姿の一人の少女と目が合う。

（白無垢かあゝ結婚するのかなあ？綺麗な人だなあ…いや綺麗というか可憐だあ…っと俺はなにを考えて！？逃げなきゃ！！さすがにこれはふつうじゃねえ…あれ？おかしい…）

誠也は逃げようとするが体が動かない。動かないというか…その女性から目が話せない。

（え？なんで？どうして？俺なにが起きたの？）

ふとその少女がにっこりと笑う。

（ああすごく可愛い。そしてなんだか懐かしい…体がふわふわしてきた…なんだろうこの暖かさ…なんか眠くなってる…）

誠也がそんなことを思っていると再度少女が笑い

「うふふ」

先ほどと同じく可憐にそして先ほどど違い妖艶に笑うと少女の唇が動いた。

「お迎えにあがりました。主様。」

誠也は意識を失った。

- - - - -

狐の嫁入り（後書き）

次からついに異世界です。

1話が短いな・・・次からもう少し延ばすようにした方がいいのかな・・・？

全然方向性もまだ決まっておりますませんが、よろしければ生温かい感想をいただければと思います。
よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1660ba/>

狐付き

2012年1月4日05時47分発行